

第82・83号

昭和58年1月25日

内容

- 国際関係における競争と協調…1~2
- 第9回国際学生セミナー……………2~4
- 第5回大学合同セミナー……………5~6
- 第19回大学教員懇談会……………7~9
- 理事会・評議員会……………9
- 昭和57年度第2回共同セミナー委員会……………10
- 事業部だより……………11
- グラフ特集/夏から秋のキャンパスに拾う……………12~13

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
〈所在地〉
東京都八王子市下柚木(☎192-03)
電話 0426-76-8511~3
振替口座 東京 5-7 4590番

編集
大学セミナー・ハウス
企画室
編集人 中川秀森
発行人 吉川孔敏
製作 中央公論事業出版

私は信州の山の中で、毎日、日本アルプスを見ながら育った人間です。日本アルプスに登るためには、まず前山に登ります。日本は町人国家を目指すべきか、あるいはモラトリアム国家の道を歩むべきか、というさまざまな議論がありますが、われわれはちやうど、この前山の頂きから、穂高に登るか、白馬か、それとも常念に登るかを展望しているようなものでしょう。

私は仕事の上で月に一、二回外国を廻りますが、世界中どこへ行っても大きな問題は失業です。日本の失業率は二・四%ないし二・五%と言われていますが、欧米では一〇%もしくはそれ以上になっています。しかも失業している人々というのは、大部分が大学を卒業したばかりの若者です。自分の希望する職がないばかりでなく、往々にして他の仕事もないという事は、若者にとっては大きな失望であります。私は、最近、パリ在住の国際公務員で、自分の息子をロンドン大学に学ばせている、という英国人に会いました。かれは息子を大学に訪ねたところ、勉強している様子が全くない。どうせ大学を出ても職がないのだから勉強してもなくても同じだ、という大学内のニヒリスティックで重たい空気にかれは大変失望し、息子をアメリカの大学へ転校させた。かれの見解では、アメリカの学生の方がまだ勉強している、互いに競争してよい職に就こうとしている、ということでした。

こうした失業は、世界全体の景気ないし経済の停滞に、その原因があります。それは周期的とも構

造的とも、あるいは人為的とも言われ、人によって意見が分かれますが、現象的に見れば、一九七三年の第一次オイルショック、七九年の第二次オイルショックによる石油価格の暴騰から購買力の偏在やインフレが起きて世界経済はこれに対応できなくなったということでありましょう。欧米各国は財政の緊縮政策をとった結果、私企業への投資や新しい生産技術や施設をつくる努力が減少し、深刻な失業問題を抱えることになったの

第9回国際学生セミナー
特別講演から
国際関係における
競争と協調



特命全権大使
吉野 文 六

ればならない、と主張します。もちろん、これらは自由貿易体制の下では、世界は多刃の(Blunt, latent)な関係にあり、二国間の貿易のバランスは必ずしもとれなくてよい、ということを知っています。日本に対して入超であるという理由で、様々なかたちの批判が日本に向けられているのです。

ところが、欧米の対日批判よりある意味ではもっと深刻な問題がヨーロッパとアメリカの間に横た

です。ヨーロッパの諸国は、かつて誇っていた賃金のスライド制を廃止、もしくは一時停止し、失業手当や医療手当などの社会主義政策を徐々に削減してきており、またこうした現状を不満とする情況がヨーロッパ各国において、多くの政権交代を生み出してきているのは、ご承知のとおりです。

最近、激化の一途を辿っている対日批判は、このような状況から出てきたものです。欧米の政治家たちは、この失業問題を解決するには、日本からの輸入を抑えなけ

わっています。両者の関係には、絶対に相手の主張に耳を傾けない、という文化的な背景があり、パイプラインの問題はその一つの現われです。ヨーロッパは二、三年前から、シベリア産のガスと引き替えにパイプや圧縮施設をソ連に売るといった交渉を進めてきたわけですが、アメリカはポーランドの軍事政権成立を契機に、アメリカの息のかかった会社がパイプラインに関与してはならない、という圧力をかけてきた。これは法律上、extraterritorialityという非

常に複雑な法律問題を含んでいるばかりでなく、発展途上の国の経済発展にも役立っていると称して、多国籍企業の進出を推し進めてきたヨーロッパ自身が窮地に立たされることになる。ヨーロッパがソ連のエネルギーに依存するのは危険であり、NATOの同盟を破壊することになる、というアメリカの主張に対して、エネルギー資源の開発を援助することはソ連が中近東石油に手を出す公算を低め、戦争を回避することにつながる、というヨーロッパの主張が、真向から衝突していると言えましょう。

両者に見られる見解の相違は、さらに深刻な局面へと波及しています。一つは、ヨーロッパにおけるアメリカの核の問題です。79年12月に採択されたNATOの決議に沿って、ソ連に対抗しうる中距離核兵器をアメリカの手によって備えた上で、ソ連と軍縮の交渉に臨む、という態度をヨーロッパはとっています。ドイツ国民の七〇%が現在、これを支持しています。核戦争の核兵器の新設はやむを得ず待たせたい、という意見です。これらの人たちは大部分戦争を知らない若者たちです。もう一つの問題は、ドイツを中心にヨーロッパに駐屯している三〇万人の米兵の問題です。最近のアメリカ議会では、毎年のようにヨーロッパからの米兵の撤退が主張されています。アメリカは本来的に孤立主義を尊重する国であり、とりわけ第二次大戦前まではその傾向が強かったのです。もちろん第二次大戦後、アメリカが突っ込んでき

(次ページに続く)

第9回国際学生セミナー

主題Ⅱ 発展と平和のモデルを求めて

——日本再考——

期日——昭和57年10月29～31日

△特別講演▽

国際関係における競争と協調

特命全権大使 吉野文六氏

△ゲスト—お話とスライド—▽

南の顔

国際協力推進協会専務理事

松本 洋氏

△セクション演習▽

A 日本の経済発展とその教訓

一橋大学教授 南 亮進氏

B アジアにおける貧困の構造

筑波大学助教授 渡辺利夫氏

C 日本はいかなる点で世界一なのか?

津田塾大学教授

ダグラス・ラミス氏

D 第三文化の日本人

早稲田大学教授 菊地 靖氏

E 日本民族の国際化—文化交流のすずめ—

外務省領事移任部部长 藤本芳男氏

国際基督教大学教授 横田洋三氏

△運営委員▽

早稲田大学教授 菊地 靖氏

東京工業大学教授 熊田慎宣氏

筑波大学助教授 渡辺利夫氏

△参加学生▽92名(内女子33名)

⑧国籍別(計6カ国)——日本

(77)、アメリカ(11)、アルゼンチン、ベトナム、アルジェリア、フィリピン(各1)。

⑨大学別(計27校)——ICU

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

世界の現状を把握し、将来を展望するための新しいモデルについて、さまざまな考え方が出されている。主な理由としては、学問分野の専門化、価値観の多様化、利害の複雑化などがあげられる。はたして、われわれはこれらの問題を乗り越えて、単一の世界モデルを共有できるのであろうか。

今回のセミナーは、専門分野や国籍を異にする学生諸君が三日間の討論と共同生活の体験を通じて、発展と平和の問題をどこまで共通の問題として考え、問題解決のための方策を模索できるかをたためず、一つの試みである。問題を一応日本にしばり、世界の発展と

必要な、あるいは自国のために望ましい発展と平和を求めて、パラバラに行動してきた。国際社会が「社会」の名に値する秩序をかくらうじて維持できたのは、ごく一部の大国が世界全体に支配権を確立したり、諸国の力関係が均衡を保っていたり、世界全体が経済的に安定していたりといったような、偶然的要素に基づくものであった。したがって、この秩序は、しばしば戦争や世界の不況によって崩れ、多くの災禍を人類にもたらした。

しかし、第二次世界大戦後、未曾有の戦争による悲惨な体験と、科学技術の進歩により、人類は、国境により分断されてきた。こうして、世界の状況は、主権国家並存のモデルから別の新しいモデルへと変容しつつあるが、この新しいモデルがどのようなものであるのか、またどのようなものであるべきなのかという点については、見方が錯綜している。

（前ページよりつづく）

た自由主義体制を守るためには、簡単に海外から撤兵できないという事情がありますが、世論の動きには微妙な変化がみられるようになっていいます。

最後にもう一度、世界経済の不況に立ち戻ってみましょう。今年はいよいよ成長率にもなり得ると言われる欧米に対して、幸いなことに日本の成長率は3%ぐらいいで、日本の輸出競争力は最近の円の動きも伴って、きわめて強くなっています。政府が保護主義をとらない限り、日本の子会社や合弁会社となって生き延びようとしているのが、欧米の産業界の動きです。たとえば、ドイツのオートバイ業界はBMWを除きここ二、三年間ですっかり日本の代理店へ転換してしまいました。たしかに、戦後日本の経済発展に大きな役割を果たしたのは、アメリカのブレトン・ウッズ体制の下ではぐくまれたIMF、GATTの原則に基

平和に日本がこれまでどのようにかわって来たか、今後日本はどのようにそれに貢献できるか、について一緒に考えてみたい。

◇

プログラムは中川秀泰館長の歓迎のあいさつに続いて、運営委員長の横田氏の開講のあいさつで始まった。氏は、学問の根底には自由がある。国際学生セミナーは、国籍・年齢・性別を超えた自由を提供する場なのであるから、参加者も自由に考え、自由に話し合い、自由に行動してほしい、と語りかけた。

つづいて共通セッションに入

づく自由貿易体制であると言えましょう。しかし、われわれの生活はこれによって本当に豊かになったか、という点、日本の国内政策に問題なしとは言えません。過去三〇年間、世界の船舶の半分を賄ってきた日本の造船業は、場合によっては利益をくってまで安い船を造るという競争を繰り返してきたというように、そのやり方に疑問が残ります。また、日本の住宅事情ははるかに欧米より劣り、自然破壊も進んでいます。これは経済成長達成のためにわれわれが払ってきた大きな犠牲でありま

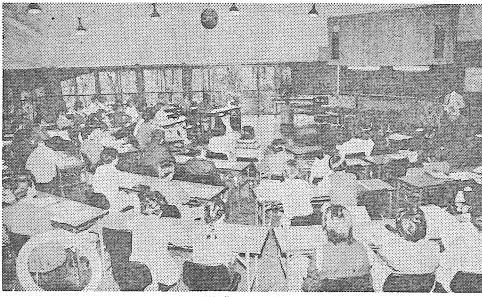
う。

幸いなことに、われわれはハイテクノロジーの開発によって自然破壊を抑えていくことが可能になってきました。発展と平和という大きなラインに沿って、日本は理想の峰を求めていかねばならないと思います。

（第9回国際学生セミナーの特別講演より。文責・編集者）

る。セミナーの導入部として、各指導教授から大要次のような話があった。

○菊地靖氏 フィリピン人にとってフィリピン文化は第一文化、日本人にとって日本文化は第一文化。フィリピンで数年を過ごした私にとってフィリピンは第二文化である。フィリピン文化に接触することにより、日本人としての私自身のなかに新しい価値体系の萌芽(第三文化)が感じられる。日本経済の発展は、多くの日本人に異文化接触の機会を与えた。同質文化の温室の中にいた人々が、その温室を飛び出して異文化の広い



開講式(講堂)

空間を確保せねばならなくなつた。

これまで「周縁の人」と呼ばれていた人々が、異文化接触と移入による内発的創造によって個人に適合した第三の文化を生みだす。たとえば、帰国子女たちは今日、日本社会のなかで重要な中心集団を形成しつつある。第三文化を有する人々がホモジニアスな日本社会に新しい価値観を創り出しつつある。発展と平和のモデルは、こういう第三文化人のなかからでてくるのではないか。

○南亮進氏 これまで経済学や経済理論との密接な関係のもとに、日本経済の歴史的發展を数量的に分析する仕事をしてきた。とりわけ、日本の経済發展の原動力である技術革新の問題。すなわち技術革新が経済構造に及ぼす影響について、あるいは急速な技術革新を可能にする経済構造の問題。セクション演習では、日本の経

濟發展を可能にした原動力としての技術革新の意味について考えてみよう。歴史学者ガーションクロン(A. Gershenkron)によれば、後發国はすでに發明されている最先端の技術を利用してできるから技術導入には有利であるという。確かに、日本の明治以降の經濟發展を見ればうなずける点がある。ところが、現在の發展途上国に最先端の技術を導入することによって經濟成長は可能だろうか。では、なぜ日本は近代技術の導入と定着が可能だったのか。この点を説明することによって、經濟發展のモデルを考えてみたい。

○渡辺利夫氏 「開發經濟學」の分野にはいまだに標準的テキストがない。開發經濟學は、發展途上国の開發のための処方箋を提供する学問であるが、わたしの主要な関心は、アジアにおける貧困の問題である。

近年、アジア諸国の工業成長率は全般的に相当高い。しかし一方で、アジア諸国の多くは、Basic needs(人間がこの世に生を受けたい以上、最低限満たされるべきニーズ)すらも確保できない。いわゆる絶対的貧困 absolute poverty を特に農村部を中心に大規模に堆積させている。しかもこの絶対的貧困は、高度工業成長によっても容易に打破できない。零細農民と絶対的貧困層の拡大、これに伴う農民社会の緊張と不安定性が、現代アジアにおけるかつてない高度成長期に生じている。アジアでは、このようなきわめて対照的な事実が、ここ数十年の間にできていくが、貧困というものがどういう構造をもち、どういうメカニズ

ムのもとで發生してくるのか、開發途上国はそれにどのように対処していくべきか、ということを考えてみよう。

○ダグラス・ラミス氏 「ジャバノ・アズ・ナンバワン」といわれているが、いったいいかなる意味でナンバワンなのか。アメリカで夢見て達成できなかった経営ユニットピアが日本では実現した。ボーワルの「ジャバノ・アズ・ナンバワン」もW・G・オオウチの「セオリトピア」もこうした日本の経営ユニットピアに対する憧れの表明だ。しかし、果たしてこのような経営ユニットピアを手放して喜べるだろうか。工場の労働者が疎外労働に愛着を持つことが本当に良いことだろうか。疑問をもって考えるべきだ。

日本は平和のモデルになりうるか。日本の平和憲法が世界平和に貢献できるかどうかを問うためには、その前提として他ならぬ日本で平和憲法が実現されていないなければならないだろう。發展や平和という言葉の意味を根源的に問い直してみたい。

○藤本芳男氏 これまで日本人は世界全体のバースペクティヴのなかで日本民族がどういう位置を占めているのか、考えたことはなかった。原則の支配する国際社会のなかで日本は自国の原則を主張してきたといえるだろうか。

これまでの日本の対外接触は、国家レベルのものに限られた。人と人との相互理解は乏しかった。物の交易や技術の対外提供によって日本の經濟的プレゼンスは拡大したが、政治面、文化面、倫理面における日本のイメージは非常に希

薄である。戦後失われたと言われる日本人としてのアイデンティティを再確認しながら、日本人の国際化を進め、同時に日本独自の文化と資質を武器に、世界の停滞した部分を活性化する方法を考えてみたい。

○横田洋三氏 一九五〇年から六〇年代にアメリカで發達した経営學を日本は翻訳などを通して学んだ。しかし、日本はアメリカの経営理論たとえば品質管理(QC)にしてもそのままそっくり移入したわけではなく、そこに日本的価値を付加してきた。

日本は經濟成長によって、GNPが世界の最高水準に到達したものの、国民ひとりひとりの生活の質をみると世界的水準を下回る。日本の經濟成長をモデルとして考える場合には、こういう点に留意する必要があるだろう。

以上のようにセクション演習のテーマが提示され、これを手がかりに各セミナー室で都合三回、八時間に及ぶ演習が行なわれた。

二日目は昼食後に特別講演が配された。講師紹介と進行役をつとめられた国際プログラム委員会委員長の中嶋嶺雄・東京外国語大学教授は特別講演に先立ち、過去八回の国際学生セミナーを回想された。「70年代前半はアジアの開發と平和が、70年代後半には文化接触(摩擦)の中で日本はどうすればよいかが問題にされた。そして80年代前半は、国際社会における發展と平和のモデルが求められている。このように国際学生セミナーは時々の世界情勢を反映しており、そういう意味からも、日本の經濟外交の第一線で活躍されている吉野文六・特命全權大使をお迎えしてお話をうかがえることは大変有益である」。

GATT會議を直前にひかえたお忙しいスケジュールのなかを來館して下さった吉野文六氏は、「国際関係における競争と協調」をテーマに、日米の貿易摩擦をめぐるやりとりなど、現場に密着した話題を織りまぜながら、二時間にわたって学生に語りかけられた(要旨はフロント・ページを参照されたい)。

ティー・タイムの後は、運営委員の熊田禎宣氏の司会によるゲスト講演。ゲストは海外經驗豊かな松本洋・國際協力推進協会専務理事。松本氏はご自分で撮影された写真二〇〇枚とユーマに富むお話を二南国の人々の表情を伝える。開發とは何か、援助とは何か、参加者に語りかける。「人民の、人民による、人民のための發展」という言葉が印象深かった(要旨は4頁に別掲)。

◇

最終日は、学生議長団の舵とりによる全体集会である。二日間にわたるセクション演習の報告と全体討論。まずセクション演習の報告を簡単に紹介しよう。

▼Aセクション 日本における技術導入のプロセスをそのまま外国にあてはめることは不可能だが、日本が国内情勢を考慮しながら、うまく技術を改良したうえで導入したという点は、開發途上国にとってもひとつの教訓になるだろう。

▼Bセクション 世界的な景気の停滞のなかで、發展途上国はこれ

までのように資本の論理に任せて開発を進めることはできない。適正技術(Appropriate technology)の導入に際しては、資本集約的なものではなく労働集約的なものを、また現地の文化や価値と衝突しないものを考えるべきだ。

▼Cセクション 発展と平和のモデルを考える前に、発展や平和の真の意味を問うべきだ。たとえば、「発展」ということばは歴史的に見ると、植民地主義のイデオロギーであった。真の発展とは、操作されない自由な人間を形成することではないか。

▼Dセクション 異文化接触に伴うアイデンティティの喪失状況のなかで、新たなアイデンティティの獲得について議論した。『第三文化人』というのはそのモデルであるが、現代日本ではそうした人が年々増加しているにもかかわらず、正当に評価されていない。当面は、個人の生活レベルで第三文化人として実践していく以外にないだろう。

▼Eセクション 国際社会のなかで日本は批判の矢面に立たされている。国際社会で通用する倫理規範が日本には欠落している。原則の支配する国際社会に通用する倫理規範を日本も持つべきだ。以上のような報告をうけて、全体で活発な論議が交わされたが、紙面の都合で割愛せざるを得ない。最後に、三日間を振り返って指導教授から次のようなコメントがあった。

○「相対主観」という概念は簡単に言えば、たとえば、死者の葬り方は火葬、土葬など各文化によってさまざまであるが、死者を葬

る」という行動様式では共通している、そういう共通認識のことだと考えてもらえばよい。(菊地氏)

○日本の経済発展は歴史的事実に照らして考えると第三世界のモデルとして本当に使えるのか。日本の発展の歴史は戦争と搾取、植民地主義と帝国主義の産物ではないか。「発展」とか「平和」とかの意味を自明の前提とせずに疑うことから出発してほしい。(ラムリス氏)

○本セミナーに参加して、現代では日本の伝統的な価値体系が崩壊しているのではないかと、という恐怖を抱くに至った。これは私にとって新しい発見であった。これから国際社会でも通用する日本の倫理規範というものを考えていきたい。(藤本氏)

こうして三日間に及ぶ自由な論議の場は閉じられた。本セミナーではもちろん、ひとつの結論はでなかったが、漠然としたイメージがいくつかが光があてられ、進むべきいくつものルートが提示されたように思われる。四回シリーズの共通テーマ『発展と平和のモデルを求めて』もここに第一歩を踏み出し、今後さらに焦点が絞られ、内容も深められていくことを期待したい。

発展への第一歩

明治学院大学文学部二年 福田 浩子

「これだ!」この瞬間の閃きは、このほんの一カ月の間に大きく私を変えた。ちょうどその頃、二ヵ月にわたる米国滞在を終えて一ヵ

月、なにか私の心の中に、もやもやと形にならないけれど、日に日に大きくなって行くものがあり、私はそれをこの手でつかみ取りたい気持ちで一杯だった。そこへ飛び込んで来たのが、この第9回国際学生セミナーのポスター。あの時めきは、久しぶりのカイカン。そして私は、本当に多くの収穫を得ることができた。そのもやもやは、今や、はつきりとした輪郭を持ちつつある。まさに発展とも言わべき「私」を拠点とした広がり、内外ともに、ぐんぐん伸びてきている。

その三日間とは、実に混沌の日であったが、時がたつにつれてセミナーが私に与えてくれたものが、一つ一つ目に映るようになってい

△ゲスト講演要旨▽

南の顔



国際協力推進協会 専務理事 松本 洋

人の顔も、町の顔も、国の顔も時とともに変化する。町の表情や国のたえずまはるは、そこに住む人の生活態度や営みに関わる。南の顔は、時には北の資本や技術によってその変化を助けられることもあるが、現地の気候や風土を無視するような変化は、一時的で馴染まない。南の国の人々はそのことをよく知っている。

何世代にもわたってその土地で生き続けてきた人々の血の中には伝統的な体験が受け継がれている。彼らの生き方は静的であり刺

た。とにかく、夢中になって、話して話して話したあの熱気。同じ関心を持ち、かつ違った見解を持ち、ある一つのテーマに、痺れるほど真剣に取り組む友。その存在を知ることができた喜び。また、彼らが彼女らが、これから共にこの自国日本において必死に同じ問題を抱え押し進んで行く仲間なのだと感じた時の不思議な自信。皆の熱っぽさにどんなに勇気づけられ、励まされたことか。セミナー・ハウスの三日間、一切の煩わしさから解放されて、体内にある力を感じる存分に発散し、それがある一点に集中した。今回の私の第一目的であった「人の話を聞く」、それも十分にできた。多数の人からの多数の意見を聞いて

激を待っている。開発は南の国々の動的变化を誘うが、往々にして現地の状況を無視したものが多

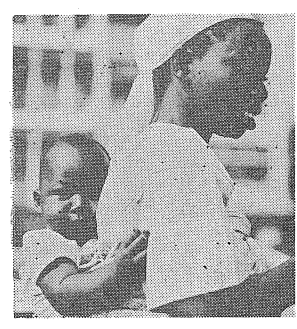
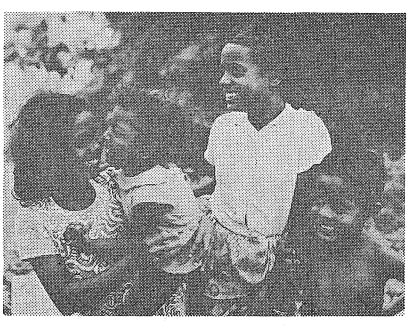
い。そもそも開発とは人間の自然に対する挑戦である。人間の知識や技術が自然を征服したかに見えるときもある。人間によって開発された自然は時の経過とともに自然に戻る。そこに新技術の導入の余地が残される。

開発は南の顔に変化をもたらす

て行く中で、今まで私の中にあったものと、新しいものとの接触の上で、吸収と転換を続けた。そして今、新たな、内省的な私独自のもの、価値観とも言うべきものがあるか、それが生まれつつあるのである。

私は、このセミナーを起点に、ある確かなものを築き上げることを目指して意気揚々と歩んで行きたいと思う。

最後に、私たち学生に、あなたかさを持って、これらの可能性、それに十分な空間を与えて下さったセミナー・ハウスのスタッフの方々に心から感謝したいと思います。(Cセクション)



一つの要素である。その価値評価は時代とともに変わる。南の顔に変化を呼び込む開発は南の人々だけでなく、北の人々にも責任がある。一致協力して世界の顔づくりに努力したいものである。

写真提供：松本洋氏、文責・編集者

第5回大学合同セミナー

— 五大学合同セミナー —

主題Ⅱ 現代社会と社会学

—— 社会学の新たな可能性を求めて ——

期日 — 昭和57年11月26～28日

△運営委員▽

△セクション演習▽
A 都市に生きる「ゴフマンの見地」にたつて — 田中義久氏

B 慶応義塾大学教授 山岸 健氏

C 人間の一生とは何か — 農村社会を事例として — 早稲田大学教授 正岡寛司氏

D 早稲田大学教授 藤見純子氏

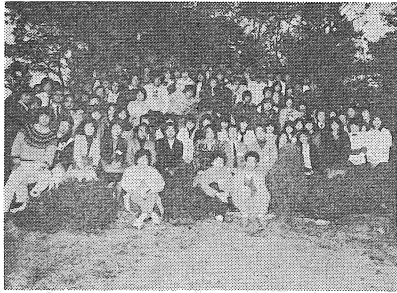
E 性別役割と家族 早稲田大学教授 藤見純子氏

F 現代日本の社会意識 — 私生活主義の行方 — 法政大学教授 田中義久氏

G 中央大学助教授 川崎嘉元氏

H 現代家族と社会学 — 老人扶養問題をめぐって — 慶応義塾大学教授 平野敏政氏

I 宗教と社会学 — イスラム教を中心に — 明治学院大学講師 渡辺雅子氏



学生社会学会をめぐりて

△運営委員▽
法政大学教授 田中義久氏
△参加学生▽92名(内女子43名)
慶大、早大(各32)、法大(19)、明治学院大(5)、中大(4)、合計5校

社会学を専攻する三大学五ゼミから出発した大学合同セミナーは今回で三回目を迎えた。前回は「現代社会におけるライフ・スタイル」(昭和56年11月27日、29日)というテーマで現代日本人のライフ・スタイルについて議論した。今回は過去二回の経験を踏まえて、広く東京地区諸大学の社会学専攻の学生に研究交流の窓を開いていくことを目的とし、五大学七ゼミに輪を広げ、準備段階から学生の連絡委員が軸となつて、積極的に企画を推し進めてきた。

◇ 運営委員の田中義久氏は開講に当たりセミナーの主旨を以下のよう

に説明された。現代は、20世紀の世紀末状況とみかえ、同時に、21世紀への新たな胎動をはらみつつある変革期であると言えよう。現代の社会学は、これに対して、各専門領域ごとに理論を再構成し、実証的分析とつきあわせをしなければならぬ一ひとつの転換期にさしかかっているように思われる。現代の社会

学は、各領域のなかでの「中範囲の理論」による理論と実証の総合を一步一歩確かなものにしながら、それらの積み重ねに立脚した21世紀社会への展望を生み出さなければならぬ。本セミナーにおける活発な討論を現代社会学のこのような可能性を追求する試みのひとつの里程標としたい。

つづいて、準備委員代表の石川雅寛君は、当日に至るまでの経過に触れながら参加者に次のように語りかけた。「今日、社会学を学ぶ私たち学生をとりまく状況はどのようなものでしょうか。大学間の相互交流をもつこともなく、自分の大学の枠のなかに閉じこもり、社会学が現在何処に関心を寄せ、どのような方向を志向しつつあるのか、という現代社会学についての全体像も不可視の状況に置かれているのではないのでしょうか。こうした状況を乗り越えていくためには、まず共同で討議する場をつくる必要があるでしょう。現代社会学が抱える問題と社会学の可能性について議論したい。」

二泊三日にわたるセミナーは、ゼミの研究発表、共通セッション、セクション演習、パネル・ディスカッション、反省会などで構成されている。以下参加者から寄せられた原稿をもとにセミナーの一端を紹介したい。なお原稿を寄せてくれた学生諸君にはここに謝意を表したい。

◇ まず、学生による司会で五時間余りにわたり展開された研究発表のテーマは次のとおりである。現代社会学におけるF・ゴフマンのバースペクティブの持つ意味

と可能性の考察(山岸健氏)。農村社会に生活する人々のライフ・コースを事例に生活者の人生の歩みを再構成し、人生の多様化と画一化、あるいは歴史・社会状況の人生に対する規定性と個人の自由選択の問題(正岡寛氏)。現代家族、とりわけ共働き夫婦の増加に伴う家族内の性別役割の変化の問題(藤見純子氏)。高度経済成長の落し子とも呼ぶべき私生活主義が二度のオイル・ショックを経て、今日何処に志向しているのか(田中義久氏)。産業社会における老人扶養問題を、「交換の世界」(経済的・政治的な互酬の世界)と「価値の世界」(倫理、規範などの価値意識の世界)に分けて考察する(平野敏政氏)。聖なる領域ともいえる宗教的価値観が世俗的な政治・経済にどのような影響を及ぼしているのか、イスラム世界を中心に考察する(渡辺雅子氏)。

一年間におたる各ゼミの研究結果は、当日全員に配布された80頁に及ぶ資料に象徴される。研究発表により、それらの成果が共有された後は、山岸・渡辺ゼミ、正岡・田中・川崎ゼミ、平野・藤見ゼミという具合に三つのセクションに分かれて、夜及び翌日の午前中の二回にわたり演習が行なわれた。

◇ 二日目の昼食後は、演習助手の池田義孝氏の司会による共通セッションである。各指導教授による社会学との出会いが披露され参加学生への良い刺激となった。

○川崎嘉元氏 西表島のイリオモテヤマネコの保護に関わる調査のなかで、新しい社会学のバースペクティブの必要性を実感した。動物の生存と人間の調和という問題は、従来の調査方法では不十分である、と。

○藤見純子氏 人間関係のしがらみを考えることが社会学に入るきっかけになった。しかし、調査などを通して感得した人間関係を社会学の用語で説明することのどこかしさを感ずる。いまライフ・コース分析はこのような私の不満をかなり補ってくれると思う。

○平野敏政氏 60年安保を契機に個人としての主体の危さ、主体を取り巻く不可知なものの存在などに気づき社会学の門をくぐったと回想する。社会学に期待するものは、私たちがどこまでわけのわからないものに骨絡みにされ、自分たち自身でなくなるのか、ということを開いて質すことだ。

○正岡寛司氏 経済学から社会学に入ったが、いまま社会学の可能性を信じている。従来の役割理論は社会体系のもつ規定性を強調しすぎたきらいがある。それに反撥するかのようになり、個人が役割を創出する過程に着目するようになってくるが、時間軸を加えることで従来の役割概念も重要な意味をもってくるのではないかと。

○田中義久氏 現代の先進資本主義社会ではパーソンのいうような道具的な役割行いは消滅している。そうした状況のみで苦しむことを回避し、快楽のみを追求する功利主義的態度が蔓延しているが、そこには未来はない。道具的な社会関係にかわる新たな社会関係とそれを支えるエートスについてじっくりと考えてみたい。

○渡辺雅子氏 社会化がうまくできない逸脱者はパソンズ社会学

では統制の対象でしかない。一般に新興宗教の信者は逸脱者とみなされてくるが、わたしはこうした社会に適應できない人がある信念体系を獲得することによってアイデンティティを確保し、新しい価値体系を生み出していく可能性を追求したい。

○山岸健氏 絵画と文学から社会学に入る。社会学を中心の枠組に据えて美学と美術史を同時に研究してきた。今は次の三つに関心をもっている。①社会学的への人間学、②都市の社会現象学、③文学と絵画の社会学。

◇ 続いてパネル・デイスカッションが夕食をはさんで四時間余にわたって行なわれた。課題は、①現代社会像の提示、②社会学のあるべき姿の追求である。テーマが漠然としてしたが議論が散漫になりがちであったが、集約的に討論が行なわれたことは有意義であった。

現代社会の諸相について各セッションからさまざまな報告がなされたが、改めて現代社会の全体像を捉えることの困難さが表面化するかたちとなった。さらに分析装置としての社会学自体のもつ問題性が議論されたが、社会学の可能性を探るためには従来の方法論をもう一度再検討する作業が必要だということになり、一つの結論は勿論導き出せなかつたものの、今後のセミナーへの展望が開かれた。

◇ 三日目の午前中は反省会。まず参加者全員にその場でセミナーの感想を書いて提出してもらった。つづいて今後のセミナーのあり方

などについて話し合われたが、次の準備などは当面今回の準備委員会が中心になって進めていくことになった。

こうして大学合同セミナーは、「東京学生社会学会」として新生する。ここ多摩の丘にまたひとつ大学間交流の苗床を加えた。次回はセミナー・ハウスからも自立して、たくましさを増すにちがいない。

最後に、本セミナーの準備から開催にいたるまで多方面にわたりご指導下さった山岸、田中、正岡、平野、川崎、藤見、渡辺の各氏、終始学生を見守って下さった池岡、大久保、増子の各氏に改めて謝意を表したい。

学生社会学会への展望

早稲田大学助手 池岡 義孝

昭和五六年の早春に、セミナー・ハウスの新企画「大学合同セミナー」の幕をあけるといふ重要な役割を担ってスタートした「社会学合同セミナー」も今回で第三回を迎えた。先生方も含めると一〇〇名をこえる規模で盛況のうち運営された今回の合同セミナーは、このセミナーの第一回が四〇名足らずの人数でおぼつかないスタートをきったことを知っている私には大変感慨深いものがあった。

だが、この私の想いは何も参加人数の上での盛況という事実だけに帰因するものではない。もちろん、この合同セミナーを共有する者の輪が回を追うごとに着実に拡がりつつあることは喜ぶべきことには違いない。しかし、それにも

まして私が強調したいのは、今回の合同セミナーの企画・運営が準備委員（スタッフ）を中心とする学生自身の手によって自主的に運営されたという事実である。私はこの事実を高く評価したいし、またこのことがもっている重要な意味を今回のセミナーの参加者に共有してほしいと思う。

そもそも、この「大学合同セミナー」は、専門分野を同じくする数大学のゼミナールが合同して自主的に運営し、研究を深め交流しあうという目的のもと企画されたものであった。つまり、合同ゼミナールの掲げる理念は専門志向と自主的運営の二枚看板だったわけである。ところが、これまで二回の社会学合同セミナーをふり返るとその要件と、専門志向という点ではその条件をみたしたといえるが、自主的運営の理念の方は十分に実現されてはいなかったという

のが率直な意見である。企画から運営に至るまで先生方とセミナー・ハウスの企画室に多くの点で依存しながらどうにか運営されてきたというのが実状だったのである。そして、こうした学生の側での消極的な姿勢自体が、これまでセミナー終了時に参加者から「不完全燃焼」といふようなマイナスの感想のもっとも大きな原因ともなっていたと思われる。

今回の合同セミナーでは、こうした反省点をふまえて、それを克服する取り組みが意欲的に成された。もちろん、まだ手さぐりの段階で不備な点も多かったろうが、各大学から選出されたスタッフを中心に企画から運営に至るま

で学生の自主性が十分に発揮されたのである。この自主的運営というもう一つのレールが敷かれ、名実ともに「合同セミナー」の条件をみたしたという意味で、私は今回の社会学合同セミナーを第三歩として位置づけたいと思う。

さらに、このことに加えて、ここでぜひ指摘しておかねばならない集まりの輪をさらに拡大して、東京地区の諸大学で社会学を専攻する学生の研究交流の場（学生社会学会）を実現するための礎石にしようという機運が、今回のセミナーの準備段階から高まったことである。このことは、合同ゼミナールの理念をさらに拡大し、新たな展望をきりひろくものと私は高く評価したい。

セミナー終了後も、企画・運営を中心的に担ったスタッフの諸君は定期的に会合をもち、報告書や文集の発行を企画している。私は、こうした地道な活動の積み重ねの中に、この社会学合同セミナーが学生社会学会へと飛躍する可能性を確信している。

前回の合同セミナーでわれわれが確認し合ったことは、①事前に他ゼミの研究を理解しておくこと、②学生主体の準備・運営の必要性、ということであった。こうした反省を踏まえて、今年(57年)2月にはさっそくセミナーに向けて「学生準備委員会」が発足し

た。大学間の研究交流を目指し、「東京学生社会学会」を組織して九月というところになった。以来九カ月に及ぶ準備のすえようやく開催にまで漕ぎ着けた。

セミナーを振り返ってまず第一に思い浮かぶことは、ほぼ毎週のように行なってきた準備会のことである。はじめは遠慮がちであったが、しだいにゼミの代表者としての自覚がでてきたのか、はつきりと自己主張するようになり、議論百出、収拾がつかなくなることもしばしばあった。このような形式的ではない、実質的な大学間交流のおかげでセミナーの雰囲気もだいに盛り上がった。当初心配された参加者も92名を数え成功裡に開催できた。

第二に、ゼミ員が一致団結して研究発表のために準備したこと。その結果、各人の問題意識は深まり、勉強していく方向性が見えてきた。

もちろんこうした成功した側面ばかりではなかつた。パネル・デイスカッションの運営方法、事前の研究発表の充実、セクシオン演習のスタイルなどいくつもの反省点がある。しかし、学生主導によるセミナーは今回がはじめてであるということを考えれば、そうした反省点にもかかわらず今後発展していくための確かな核ができたことを喜ぶたい。

最後に、終始大学を超えてわれわれを指導して下さった先生方、演習補佐の方、セミナー・ハウスの職員の方には多大な御支援をいただいたとき、ここにあらためてお礼申し上げます。
(法政大学社会学部三年)

社会学合同セミナーを終えて

成功した学生主導の運営

準備委員代表 石川雅寛

第19回大学教員懇談会

主題Ⅱ 国際化時代の大学

—教員と研究者を中心とした

交流の現状と将来—

期日—昭和57年10月2〜3日

△運営委員▽

中央大学教授 村田喜代治氏
立教大学教授 香原志勢氏
筑波大学教授 司馬正次氏
一橋大学教授 堀部政男氏

△参加者▽62名

法大(5)、筑波大、電通大、上智大、中央大、津田塾大、東京女子大、立教大(各3)、東大、東京大、都立大、青山学院大、大妻女子大、ICU、東京経済大、東京理科大、武蔵工業大、日大(各2)、埼玉大、千葉大、東京外大、東京農工大、お茶の水女子大、一橋大、杏林大、専修大、帝京大、日本女子大、明治大、明治学院大、広島大、慶応義塾大、文京女子短大、文部省学術国際局(各1)

△発題者▽

上智大学教授 蠟山道雄氏
広島大学教授 前田 渡氏
慶応義塾大学教授 小林規威氏



よろこそ広場にて

国際化時代に向けて大学は何をなすべきか、教員・研究者の交流のあり方をめぐり、すでに昭和50年、第11回大学教員懇談会が開かれていたが、その後の状況の進展をふまえ、さらにその問題の所在を的確にさぐる必要性から、再びここに同テーマが提案され、今回の実施を見るに至った。
本紙前号で既報のとおり、去る7月、二年半の準備を経て、正式に発足した同懇談会企画委員会が村田副委員長をはじめ四人の運営委員を中心に企画、準備にあたり

た。今回は特に日本の大学に在籍され長く教育、研究に従事する外国人教員の方々、またこれとは逆に、外国の大学にあって教員、研究者としての豊富な体験をもたれた日本人教員の方々にも、多数のご参加をいただき、生の実践報告と率直な問題提起を得たことは討論を深める上で大きな収穫であった。関係者各位のご努力、ご協力に対して深く謝意を表したい。

定刻13時30分、講堂に参集の参加者を前に開講式、中川秀恭館長、井早康正委員長、村田喜代治運営委員代表の挨拶のあと、ただちに今道・大崎両氏の発題講演に入る。

今道友信氏の「大学の将来の国際性について」は、現在も東大で哲学を講ずるかたわら、フランス、ドイツの各大学にも毎年出講されるといった氏の長い国際的経験と深い学殖に裏打ちされた大学論で、これからの討論への格好の導き手となった。

前段において、氏は西欧と日本それぞれその由来、その原初の成り立ちとその中世以来現代までの歴史的發展過程を通観しつつ、そこに見られる国際性と国家性の関わり合いの微妙な対照を讀みとらせる。後段で、氏は現状に見られる大学概念の多岐性から説き起こして、大学の将来像、そこでの国際性のありかを大要つぎのように説かれる。

「教育レベルでいえば、相互にいくつかの姉妹大学を作り、一年間ぐらゐの留學生生活をさせる、大規模な学生交換。言いかえれば一年間の放浪生活、これを経なければ

大学院に入れないくらいな大胆な発想の転換。これによる人格教育上のプラス面の見直しを提唱した。

構造についていえば、大学の教員構造の閉鎖性の打開ということだ。大学間の国際的異動をもっと容易にすることだ。たとえば三年間よその大学に出たら、また元の大学に戻れるとか、その三年間は客員教授というような外様のな扱いでなく正教授として迎えるとかいった柔軟構造につくり直すこと。

そうした構造改革のための国際的な研究グループの組織がさしあたり必要ではないか。

大学の目的は何か。副次的にはさまざまな目的があり、いづれも国家あるいは社会に有能な人材を送ることに力点が置かれているけれども、大学でなければできない目的となる、やはり真理の学問的探求であり、そのための人類の研究機関ということだろう。大学教授たちがサブティカル・イヤイを利用して研究に専念しうる教授連合組織のようなものをこしらえる(その端緒はすでに大学セミナー・ハウスに見出しうる)。できればやはり国際的にいろいろな学者が集まって一年間ぐらゐの研究を共にし、向上的なシンポジウム(共生)をめざすといった国際的な教授連合の大学もしくは研究所がほしい。そこでの生活を経てまた元の職場に戻る、といったふうな、これは将来への夢である。

そして、そこはまた新しい哲学あるいは世界観を、それぞれの学問を通じて話し合う場所であらねばならない。国際化と同時に国際化にも当然関わっていかねばなら

ならない。
と同時に、そこには必ず若い学者や学生を入れていく姿勢を残しておくことが必要だ。そうではないと初期にどんなに優れた研究所でも、どんどん老化していくことになる—

大崎仁氏「学術・教育の国際交流」は、今年(昭和57年)7月に文部大臣の諮問機関である学術審議会の特別委員会が取りまとめた報告「学術研究の国際交流協力の推進のあり方について」を資料として、文部当局の基本的見解を示されたものである。大崎氏はその前置きで、大学の国際化ということに關し、いくつかの問題点をつぎのように指摘される。

「一つは、大学の国際化を言う場合、何を理想としてイメージにもつか、その目的と必要性いかんというのか。大学本来のあり方、時空をこえた同一性ということでは、日本の大学はむしろ目を常に外に向けてつづけていたのであって、その教育研修内容において日本独自の文化的伝承発展という面が大きく欠落しているのではないか。

つぎに、大学の国際化の必要性であるが、二つの要素を私は考える。一つは学術研究の本質的要素としてのそれ、もう一つは日本の学術水準の向上、さらには日本の国力の向上ということが背景をなしている。今までの先進国から一方的に導入という、いわば直流型から相互に対等の交流型によりや、移りえたということ。もう一つは、国際的見地からいって、国際社会の一員として活動できる人材を養成するという教育的観点もし

いは実務的必要ということ。そう
いう観点から申せば、当面の政策
課題としては今道氏の言われる大
学の将来像とは多少ズレるかも知
れないけれども、高等教育機関と
しての再編成が考えられるべき
で、そのさい大学自体が多岐性や
実用性を帯びることもやむをえな
いおと思う。

なお、資料によれば、昭和57年
1月現在、本務者、いわばフルタ
イム勤務者として日本の大学では
たらく外国人教員数は国立三四
二、公立二七、私立一、八一、
計一、四八七人。これに兼務者、
いわゆるパート・タイマー二、二
八人を加えては三、七〇〇人余に
すぎない。これは日本の大学教員
数一万一、二万人に比べわめて
少なく、大学の現況を端的に表
わす象徴的な数字として認識して
おかなければなるまい。

◇ 今道・大崎両氏の講演をめぐり
少時質疑応答のち交友館でお茶
の会。定刻16時より再び講堂でセ
ッションⅡのパネル「国際化に向
けての討論・その1」に入る。さ
っそくホセ・デ・ペラ氏の司会、
アリアフィン・ベイ、H・P・ビッ
クス両氏の発題があり、それをめ
ぐって討議が行なわれた。

まずアリアフィン・ベイ氏は長い
外交官生活のち、上智大、IC
Uで非常勤講師、四年前からは筑
波大の専任として東南アジアの政
治とイスラム文化を講ずるといっ
た、その豊富な知識と経験を、巧
みな日本語で吐露される。

国際化とは何か、これを東南ア
ジアでの実際の国際社会の中で見
ると、結局支配的立場にある一つ

の文明、文化が自分中心で築く国
際社会であり、よそ者は国際社会
のメンバーのそこに置かれる。い
わゆる覇権主義的な国際化だが、
今やそれが通用しなくなり、その
存在が脅かされているのが現実
だ。今求められる国際化とは、新
しい世界の文明または文化の地図
をはっきり把握する能力にある
と、私は言いたい。

大学教育の目的は何か。初等・
高等教育が人間にノウハウを教え
るとすれば、大学はノウホワイを
教える。Means of Life 生きる
手段に代わって Meaning of Life
生きる意味を教えねばならない。
具体的には三つの段階の人間、一
つはすぐれた技術をもつ人間、二
つはすぐれた人格、学際的な広い
知識をもった人間、三つは未来社
会を予見してノウハウを選びうる
高い次元での学者の養成である。

日本の大学図書館に第三世界の
文明を語る本がほとんどないのが
残念だ。心としてのアジアを教え
ないで真の交流はありえない。
「変な外国人教師の影響で、日
本の先生方と少し異なった意見を
言う、変な学生が出てきて、こ
れが新しい視点かと理解するところ
から本当の国際化された大学が
生まれるのではないか」とのベイ
氏のことばには重い実感がこめら
れていた。

つぎはハーバード・P・ビック
ス氏である。まずその自己紹介か
らお聞きすることにした。
「一九七〇年、まだベトナム戦
争が大荒れのころ、ハーバード大
学の博士課程を修了、すぐマサチ
ューセッツ州立大学ボストン分校
の歴史学部勤め、七年間日本史

と東洋史の教鞭をとった。七七年
には家族を連れてフルブライト学
者として東京に来た。

東京に着いた私は、それから約
一年間、日本の環境になじみなが
ら、教師として必要な事柄を徐々
に身につけて、やがて法政大学の
社会学部に勤めることになったの
だが、ここで俗っぽいけれど大事
なことに触れさせてほしい。端的
にいえば生活問題である。そのこ
ろ、日本の高い家賃と国際学校へ
通わねばならない子供たちの高い
学費は、すべてフルブライトの奨
学金が賄ってくれた。家族を伴っ
て日本に長期滞在する外国人教師
たちにとって、この経済問題にど
う対処するかは至難のわざで、こ
れにはぜひもっと便宜をはかって
いたざきたい。そうした事情から
時間の半分を大学以外の副業に費
しているのが実情です」

ビックス氏による以下は大学教
師の体験報告である。
まず感動的なこととして、自分
の講義内容や教材が自由に選ば
せてもらえること。これは異国の学
生に授業することから要求される
過度の精神的負担を大きく和らげ
てくれた。教授に与えられるこう
した学問的自由とイデオロギーに
対する解放感の点では、法政大学
をはじめ日本の諸大学をしのぐ大
学がどれだけアメリカに存在する
か、反省させられた。

ただし、この学問に対する自由
で解放的な環境がそのまま学生の
向学心につながっていると言えな
いのが問題で、講義への出席状況
を指標とする限り、アメリカの学
生より低い気がする。理由はとも
あれ、日本の大学の一般の傾向と

見られる、学生の修学に対する無
規則に近い自由なやり方は少し是
正してもよいような気がする。
つぎに学生気質について。アメ
リカでは真剣な学生ほど意識的に
教師と反対の立場から挑戦してく
るし教師もまたそれを期待する向
きがある。日本の学生は総じて行
儀よく受動的で、もっと活気ある
討論をというる試みるが、それ
には余りなじめないようだ。

最後に教授会と外国人教師の関
係について。多くの外国人教師は
現在、大学の教授会への参加を認
められていないが、これには反面
たくさん事務労働から解放され
るという利点もある。ただし、教
授会への参加による、大学内の情
報の交換や大学の行事や行動への
参画意識がもたらす、かれらの教
育活動への積極的効用に計り知
れぬものがある。残念ながら大学
の組織から外され、孤立している
多くの外国人教師たちを、もっと
寛容に大学内に取り込むようにな
るまでは真の意味の大学の国際化
は望めないのではないだろうか。

◇ 夕食後は蠟山道雄氏の司会、前
田渡・小林規威両氏の発題による
セッションⅢ、パネル「国際化に
向けての討論・その2」がはじま
る。蠟山氏は出題者両氏の紹介に
ついて、国際性を言う場合、国と
国というよりも社会と社会の交流
を考えなければならないこと、
「出島根性」を日本の社会からな
くさないと大学の国際化も口頭禅
におわるおそれがありはしないか
との問題提起をされた。

前田渡氏はアメリカのユタ、
イリノイの両大学(電気工学科)

での二〇年余にわたる研究・教授
生活の体験をふまえ、そこでの授
業、単位制、試験、教員の職階、
勤務評価、給与、研究費、海外派
遣、サブティカル・リープなどに
つき具体的な実態を報告、中
でも、十数年前から実施されている
学生からのアンケート調査をもと
にしての教授内容のチェック、教
員の能力審査や研究費支給のあり
方、外国人教師への対応などは多
大の示唆を与え注目よんだ。

「英語の上手下手などよんだ。
要は教授の姿勢いかんで
す。どンドン行つて、日本人のい
いわるいを知ってもらい、こちら
も相手を知ることです」
小林規威氏もまた慶大大学院経
営管理研究科教授兼同大大学ビジ
ネス・スクール校長の現職就任の前
に、アメリカ・インディアナ大、
フィリピン・AIM(アジア経営
大学院)教授、スイスIMI(経
営大学院)客員教授の経歴をもつ
国際大学人である。

氏はまず慶大がビジネス教育の
範としたアメリカ・ハーバード大
学付属ビジネス・スクールの教授
内容とそれを導入するにあたって
の苦心、以後二五年にわたる経緯
を説明、80年代以降の日本の課題
として国益をこえての多国籍的な
経営感覚とそれを担う人材の養
成、新しい社会人教育の必要を強
調し、つぎのような提言をされる。
「これからは当然のこととして
自分と異なった価値観や文化を持
つ人々と共生、共存していかねば
ならない。それには新しく異
質な環境に積極的にアダプトして
いくフレキシビリティ、弾力性の
開発が必要かと思う。その一つの

自分と異なった価値観や文化を持
つ人々と共生、共存していかねば
ならない。それには新しく異
質な環境に積極的にアダプトして
いくフレキシビリティ、弾力性の
開発が必要かと思う。その一つの

積極的な解決策として、わが国の大学の主要講座の教官にもっと多くの外国人を採用し、少なくとも日英二ヶ国語を並用した競争講座の開設を提案したい。

それとも一つ、私が大学および大学院レベルの国際交流についてかかっていた抱いていた夢があります。それはスイスのネッスルやカナダのALCANのように、どこか海外の土地に国際的な研究教育機関を開設する。そこでは日本を含む多国籍の教員が、これまた日本を含む多国籍の学生や研究者を指導し、多国籍時代の要請にこたえる。現在の日本の経済力をも

法人ニュース

第51回理事会

第32回評議員会

昭和57年9月22日
私学会館

〔出席者〕

△理事 中川秀恭、村井資長、中村哲、飯田宗一郎、平野龍一、鈴木皇、楠川純一、岡山猛
△評議員 川原栄峰、村山松雄、須甲鉄也、森井真、内藤正
委任状による者 理事九名、評議員七三名

理事会・評議員会合同会議開会に当たり、議長の任を中村哲氏に委任したい旨の中川理事長の提案が全員の承認を得、議事に入る。中川理事長、岡山専務理事より逐次提案説明があり、それぞれ質疑応答のち、一案件を除き賛成多数で承認可決された。

▼役員人事案

つてすれば実行可能な、これこそ地球的規模の国際化時代に向けての具体的使命の一つではないかと考えるものです。

翌日は、9時30分より正午まで、セッションIVの全体会が開かれ、総括討論が行なわれた。討論の細部は、目下企画室で編集準備中の「記録書」に誌すことにし、ここでは論点を列記するにとどめられた。去る昭和57年9月に公布施行された「国立又は公立の大学における外国人教員の任用等に関する特別措置法」と関連しての外国人教師の処遇改善のあり方、特にそ

協力会員校の学長交代に伴う東京理科大学長吉識雅夫氏の理事就任、前学長小谷正雄氏の退任。

▼評議員人事案

同じく大学の学長交代および評議員の死去等により、千葉大学長井出源四郎氏の新任、香月秀雄、磯村英一、鳩山薫、斎藤真、瀬川美能留、田実渉の諸氏の退任。なお、小谷正雄氏は学識経験者として評議員に留任。

▼土地処分に関する件

当ハウス所有地と隣地に団地建設計画中の住宅・都市整備公団の所有地約五七〇坪等を価で交換、土地の有効活用を図りたい旨の提案。

▼開館20周年記念事業募資金案

20周年記念館(仮称)新築を中心とする建設および募金計画については、現下の経済情勢にかんがみ、さらに慎重に検討すべく継続審議扱いとし、次期理事会に再提案する。

▼理事定数に関する件

の教授会参加の是非、給与格差、社会保障、日本語教育等の問題等、また国際交流のための資金源(フアンド)、姉妹校制度、学位・単位制改革、国際教育研究機関設置、発展途上国との開発協力等があげられた。

最後にセッションIIの司会者ホセ・デ・ペラ氏とセッションIの講師今道友信氏のまよめのことばをもって、この報告の締めくくりとした。

ホセ・デ・ペラ氏「今や国際

去る5月31日付第50回理事会において提案の理事定数の増員については、文部省の意向を斟酌して増員を行なわず、現行定数のままとする。したがって前記理事会に提案の寄付行為第14条の変更は、評議員定数の増員のみとし、文部省に承認申請をする。

第52回理事会

第33回評議員会

昭和57年11月19日
銀行倶楽部

〔出席者〕

△理事 中川秀恭、茅誠司、村井資長、中村哲、松田武彦、岡山猛
△評議員 川原栄峰、安藤良雄、村山松雄、板垣興一、鈴木幸寿、宮地抗一
委任状による者 理事13名、評議員73名

理事会・評議員会合同会議開会に当たり、議長の任を中村哲氏に委任したい旨の中川理事長の提案

とられている。グローバルな観点に立つ大学教育が理想だらうけれども、現実は大衆教育という課題の前にそうも言ってられない大学が多い。20世紀の大学は、やはり国のため、国民のための大学ということだろう。そして他国の教育や研究の実績をインプットしてもう少し豊かな、もう少し視野の広いものにしていくことが当面の目標だろうと、この討論を通じて感じました。

今道友信氏「真理の学問的探究という、この国際的に普遍妥当な理念を大学は失ってはならないと思う。そして具体的には、国家

▼役員人事に関する件

が全員の承認を得、議事に入る。中川理事長、岡山専務理事より逐次提案説明があり、それぞれ質疑応答のち、賛成多数で承認可決された。

▼役員人事に関する件

協力会員校の学長交代および病氣辞任により、早稲田大学前総長清水司氏の退任、同新総長西原春夫氏の就任および立教大学前総長尾形典男氏の退任。

▼役員の処遇に関する件

当法人の創立に特別の寄与をされた現理事茅誠司、飯田宗一郎両氏の処遇についての左記の理事長提案。

1) 昭和41年10月14日開催の第8回理事会(議案6)および同42年5月10日開催の第6回評議員会

の行きすぎをチェックして人間の自由を守る。技術の行きすぎをチェックして人間の尊厳を守る。宗教の行きすぎをチェックして人間の非超越性を自覚すること。ただしそれだけではない、大学とは三代の文化を愛する三世代の共生の機関でなければいけない。ロスによってカオスを保つ、創造のエネルギを養うためには、そのカオスをますますカオスたらしめるために、多くの外国人教師や外国からの留学生を受け入れなければならないし、このことは国の独自性と矛盾するものではないと私は考えます。

(議案第6)の決議にみられる精神を尊重して、本法人の創立に特別の寄与をされた現理事茅誠司、飯田宗一郎両氏については、理事改選に際して、その都度再任を議題とする。

▼評議員人事に関する件

協力会員校の学長交代に伴う左記の人事案。

▼評議員人事に関する件

東京医科大学長松尾治巨氏の新任(大高裕一氏の退任)、駒沢大学水長野弘元氏の退任(大久保道舟氏の退任)、早稲田大学総長西原春夫氏の新任(清水司氏の退任)、共立女子大学長鈴木亨弘氏の新任および前立教大学総長尾形典男氏、前相模女子大学長山崎進氏の退任。

なお、前回理事会で決議の評議員定数増員の件につき文部省に申請の結果、去る11月10日付で認可された旨の報告が専務理事よりあり、一同これを承認した。

1) 昭和41年10月14日開催の第8回理事会(議案6)および同42年5月10日開催の第6回評議員会

昭和57年度
第2回共同セミナー委員会
昭和57年10月13日/私学会館

〔出席者〕岡宏子、友部直、熊坂敦子、阿久津喜弘、尾本恵市、小浪充、田中義久、神吉敏三、深海博明、徳丸吉彦、山下幸夫(敬称略)

議事は、まず昭和57年度下半期のプログラム(第120~122回共同セミナー、第5回合同セミナー)の準備経過について、担当の運営委員と企画室より報告が行なわれた。

つづいて今回の主要な議題である次年度の年間計画についての協議に入った。まず、年間の実施回数と今年度をめぐる原案を検討した結果、今年度に準じて大学共同セミナー5回、大学院共同セミナー1回、大学合同セミナー1回、計7回を実施することが承認された。また、近年、学生の関心が多

様化し、参加人員が定員をわるなど、相対的に参加者数の減少が見られる状況なので、定型化している二泊三日に対して、一泊二日を年間計画の中に組み入れることのは非、その場合の予算などが検討され、年5回の共同セミナーのうち、2回分を一泊二日で実施することで意見の一致をみた。なお、その場合の参加経費は現行九、五〇〇円に対して六、五〇〇円とすることを決定した。

次に、次年度の企画をめぐる活発な議論がなされ、大要以下のような内容と方向が決定した。

- 第123回(5月28~29日、一泊二日)、故上代たの先生追悼記念セミナー
- 第124回(11月25~27日)、芸術のためのしみ
- 第6回合同セミナー(11月11~13日)、日本の明治以降の経済思想を中心に
- 第4回大学院共同セミナー、「ギリシア」に関するもの

◆千人会

昭和57年8~11月

◇現在会員は一、六六八名です

大学人II一、二五〇名
社会人II 四一八名

◇新しく会員となられた方々

- 五名(第66回報告(申込順))
- 成蹊大学教授 上妻 精 殿
- 財日本クリスチャンアカデミー 北海道アカデミー青少年センター 鈴木 俊和殿

B 横浜国立大学教授

奥田 真文殿

A 国際通信工業㈱代表取締役

塩見 利夫殿

C 芝浦工業大学助教授

浅野 利昭殿

◇会費ありがとうございます

- 上妻精、奥田夏子、谷下市松、小川圭治、原誠、稲田拓、菅谷芳雄、宅間宏、松瀬貢規、坂井正廣、小谷友紀子、色川大吉、西川治、石田雄、菊地雄二、瀬田裕司、鳥海俊宏、十代田知三、総山孝雄、中山昌、長谷川幸男、伏見弘、鹿島健次、山岡吉久男、芥川龍男、渡辺昭夫、大吉芳彦、新井勝紘、浅井邦二、横田澄司、市川博、石井竹松、小沢重男、加藤栄一、黒田孝郎、合田周平、伊藤一

- 郎、花島重春、村上光雄、井上孝、喜多勲、安宅光雄、原島幸太郎、小田切松樹、近藤薫樹、高村象平、福田仙松、中川重雄、時村満康、米山弘、原田行男、宮野三郎、荻原洋太郎、若槻泰雄、竹下敬次、岡本剛、松村信治郎、山本芳夫、小林正一、池井優、山本武彦、菅沼憲治、児玉久雄、片山寛、岩内亮一、白浜謙一、岡村文子、押田勇雄、武藤英輔、岡中庄蔵、岡岡昭夫、藤永光之、原口隆英、林勲、島袋嘉昌、小島美枝子、島齒安雄、楢林博太郎、山本茂、武澤信一、片山清一、井手久登、近藤晃、村上陽一郎、松本健次郎、福島正久、下田弘、石村善助、朽澤耕三、島岡丘、岡村甫、坂本義和、鈴木俊和、三村卓雄、西勝、松本融、高村多賀子、松田武彦、松尾登、田村康男、田中昭二、横山宏、千葉正士、荒井良雄、西野万里、町野朔、出居茂、大澤綱一郎、森口繁一、村田徳一郎、宮坂宏、土屋哲、鈴木忠義、佐藤康胤、鞍馬菊枝、小堀桂一郎、古屋野正伍、池上秋彦、長津久、岡野恵、岡村秀男、森川不二子、平井秀、尾形憲、山田耕司、飯田経夫、島根範子、末松安晴、伊能敬、大東百合子、小和田恒、岡野澄、井深淑子、増田茂樹、堀江忠男、小田切美文、加藤一郎、朝倉孝吉、小林祐子、鈴木守、吉利和、相良惟一、内ヶ崎賢五郎、安嶋穂、稲垣寛、後藤米夫、谷俊治、笠井伍朗、平野健一郎、小島達治、加藤五六、関口利男、久武雅夫、西村善四郎、小林善彦、木村富夫、高橋泰蔵、冲中

- 重雄、長坂舜二、佐久間徹、尾形典男、安達義明、大村政男、飯島泰蔵、矢吹晋、平沢興、大竹誠、井上勝也、横田洋三、平野敬一、松田千鶴子、松岡八郎、布川角左衛門、豊田昌倫、神田信夫、小田中敏男、篠崎啓助、田村猷、今井淳、小川芳男、鈴木喬、兵頭次郎、佐々木克己、板垣與一、江尻美穂子、野田良之、川原栄隆、鳥居泰彦、小保方亨三郎、戸盛修、佐原六郎、秋田成就、坂野観司、高橋三郎、久保良雄、新田悟、松田稔子、横山美、伊藤成彦、末永国明、助盛晴、堀信一、小田滋、宮野彬、鶴岡義一、武者小路公秀、宇都栄子、矢内喜久子、小河原正己、川村亮、千住鎮雄、飯島宗享、大貫一、正路徹也、大坪秀二、永澤徳郎、堀光男、牧内森前田陽一、杉澤新一、岡茂男、森岡清美、清水英夫、浅野利昭、浅見一羊、福田隆義、森田信義、山本登、貝塚爽平、田村皖司、祖父江孝男、伊藤玄三、内田章五、山岸健、笹島恒輔、志賀英、宮田登、小川澈郎、日高精二、深沢宏、斎川仁、岡野行秀、山本よしゑ、米満澄、高野雄一、横田英嗣、藤村瞬一、東寿太郎、神山妙子、石川正一、阪田正三、山本大二郎、梶木隆一、田原虎次、田中外次、渡辺仁、佐藤公子、釜范善一、坂口順治、吉沢英子、中井虎一、友部直、大河内繁男、増田義男、中沢正和、水野伝一、衛藤藩吉、宇野義方、木下是雄、森森三、ジャン、パックス、山下幸夫、森井眞、宮崎繁樹、青木生子、大神田正儀、納富照枝、勝木保次、山口定雄、甲斐隆、満尾寿

●寄付金報告

57年6~9月

△教育プログラム資金

- 二五、五〇円 第4回大学合同セミナー
- 一参加学生一同殿
- 五、〇〇〇円 作家・田中康夫殿
- 三、〇〇〇円 第3回大学院共同セミナー
- ナ1指導教授一同殿
- 六、五〇円 第3回大学院共同セミナー
- ナ1参加者一同殿

△一般寄付金

- 五、五〇円 東京大学大学院人文科学研究所美学研究室殿
- 一〇、〇〇〇円 芝浦工業大学建築学科
- 八王子ゼミナール一同殿
- 一〇、〇〇〇円 東京理科大学教授
- 二、〇〇〇円 大澤綱一同殿
- 一、〇〇〇円 明星大学通信教育部夏期
- 五、〇〇〇円 スタリオン信者部殿
- 五、〇〇〇円 学習院大学児玉ゼミ殿
- 一五、〇〇〇円 立正大学中世仏教研究会

△植樹資金寄付

- 一〇、〇〇〇円 おさひめ幼稚園殿
- 一〇、〇〇〇円 パキスタン・カラチ電力技術グループ殿
- 三、〇〇〇円 大学英语教育学会夏期
- 三、〇〇〇円 セミナー参加者一同殿

△現物寄付

株式会社丸広百貨店殿

●事業部だより

昭和57年8・9月

夏のキャンパスから

7月後半から8月にかけては、例年夏休みの多彩な諸集会で賑わう。国際集會や全国規模の研究集會など、夏の「常連」が3泊から7泊。これに中央、明星兩大学の夏季スターリングに全国から参集する「通教生」計一二〇余名の長期滞在を加え、8月前半は満杯の日が続いた。グループ数一〇一、宿泊延人数は六、六七四人(宿舍利用率八〇%)に達した。うち大学関係の利用七三%、学術教育団体二四%、企業等社会人の研修三%であった。

一方、9月には大学単位のゼミ合宿を中心とするハウス本来の姿が戻る。いずれも夏休み終盤を利用しての来泊。これを数字で示すとグループ数は今年度最多の一三四、宿泊延人数も五、五八一人(利用率七二%)となり、うち大学関係は八七%(会員校七九%、非会員校八%)に達した。

●盛夏の諸集會から

まず8月はじめの六日間は、国際学生協會(ISA)主催の第29回国際学生会議で、アジア・太平洋地域六ヶ国からの外国人学生二

八名と日本人学生合計七〇名を迎えた。ハウスでの開催は七回目。同グループの歓迎を兼ねて、毎年実施されている「盆踊り大会」は、折からの台風に遭い中止となったが、各国の学生は文化紹介の集いでお国の歌や伝統の踊りなどを披露し合った。写真①②。

夏の常連の全国集會の中には今年で一年目(春・夏・冬の開催を合わせると三三回目)という文学教育者研究集會(通称「文教研」)がある。例年、8月6日の広島原爆記念日はさんだ三泊四日の会期である。参加九六名の教師たちの中には広島から一二名。今年も6日の朝8時15分、在泊者有志約八〇名が参集して教師館屋上で真理の鐘を点鐘し写真③、在泊者はこれを合図に一分間、それぞれ平和祈念の黙禱を捧げた。

7月末に(一泊)の大学英語教育学会(JACET)に続いて、8月は語学教育振興會(COLTID)や英語教育協議會(EELEC)の主催する二つの語学集中訓練が実施された。前者は会員校を中心とする計一四大学の学生とフランス人講師ら計四五名が仏語だけで七泊。一方、後者は全国各地からの中・高校英語教員と外国人講師計一七名が英語による共同生活で六泊、最終日には参加教員全員が会長の清水護教授から修了証を受けた。その前夜の講堂では、計八つの分団がいずれも見事なチームワークで英語劇などを演じ、生きた英語の研修と人間交流の成果を披露し合った。写真④。

●夏休み終盤、各大学の合宿

8月下旬から9月、夏休み終了

前には各大学恒例の合宿、集中ゼミが相次いだ。一六年度の法大技術連盟(一四七名)、一〇年度の立大文学部合同講義(五六名)、一四年連続春・夏・冬各一週間の合宿を二年ぶりに復活させた杉野の他にも一〇年を越すグループが多い。山梨英和短大の英文学セミナー(一七一名)では、八〇歳をこえる高齢でなおカクシヤクたる島田謹二教授が今年も熱のこもった比較文学の集中講義をされた。これも一〇年来毎年この季節に見られた情景である。

初登場のグループの中には8月終盤七泊された一橋大「外国人研究留学生夏季合宿研修」がある。同大経済学部山沢逸平教授(当ハウス国際プログラム委員)を中心に初めて試みられた大学院留学生の合宿セミナーで、社会科学専攻の研究留学生八ヶ国・一〇名、これに教職員とチューター日本人学生を加え計二〇名の参加である。これら留学生に現代日本の経済・経営・政治・法律・社会・文化に関する基礎的知識を習得させることが目的で、ハウスも研修の合間に全員を遠来荘での茶会に招待、茶道の体験と奉仕者との交流を楽しんでいた。写真⑤。

9月には課外活動の諸グループの来泊も少なくない。右記の茶会で矢内宗紫先生とともに留学生の接遇にあたった相模女大茶道部が一泊二日の合宿で遠来荘をフルに活用、ユカタ姿が同荘を彩った。同じ遠来荘で立笛を練習した学習院大リコーダー研究会の七名は、9月2日夕食パーティ写真⑦にはグループ計一二〇名)で美しい合奏

を聞かせてくれた。津田塾大の自主ITC(英語集中訓練)はこの夏も一週間の合宿。同大学の人形劇研究会は秋の定期公演の前に三泊の合宿練習を行なった。写真⑥。

昭和57年10・11月 秋のキャンパスから

秋10・11両月は学期のなかば、それに大学祭などの事情から、例年大学関係の利用が少なくなる。それも週末や祝祭日前後に集中、その合間を学会や各種研究集會、企業等の研修が埋める。また、この秋もさまざまな国際交流の集會を迎えることができた。10月はグループ数八一、宿泊延人数四、〇六六人(宿舍利用率四九%)、11月はグループ数八六、宿泊延人数二、八八二人(利用率三六%)であった。両月の延人数のうち大学関係は四六%と三六%、学術教育団体は一八%と一〇%、他は企業等社会人の利用である。

●秋の各種研究集會

この両月は、いくつかの医科系グループの集會を迎えた。10月はじめには後述の「日中寄生虫病学セミナー」とこの秋最大の集會「小児神経学セミナー」(一五一名)。後者は関西地区大学セミナーハウスと交互に開催され、当ハウスでは二年ぶり一〇回目。順天堂大「病院業務改善セミナー」は一五年目の恒例行事。今年も有山理事長、塩川病院長、小林事務部長らをはじめ同院各部署から計一二〇名が参加した。10月16日の講堂での夕食パーティ写真⑦には飯田名誉館長も出席、ハウスと順

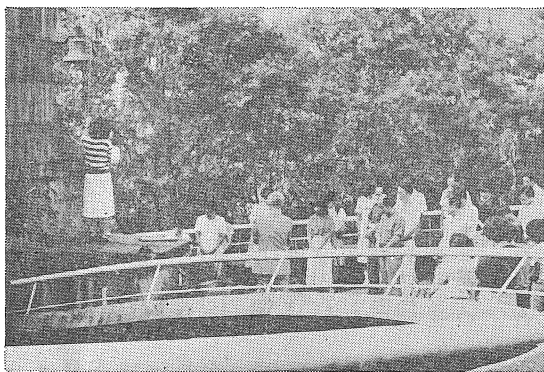
天堂大との長年にわたる友情を確かめ合った。本年度会員校に加盟された東京医科大の「血清セミナー」、帝京大の「医学研究会」も歓迎することができた。

秋は大学の垣を越えた集會も目立つ。「現象学・解釈学研究会」は五年前の第95回大学共同セミナー「理性と想像力」のBセクション(東洋大新田義弘教授)を母体に発展した自主研究会。今年で五回目で、全国一三大学の若手研究者計三五名が参加した。菊地昌典教授による東大・聖心女大合同の「ソビエトの政治・ゼミ」(二二名)は一〇年来続いている。6月に続いて今年二度目の開催となる文部省主催の厚生補導研究協議会には全国五二国立大学の関係職員など計六〇名が三泊してハウスの生活を体験された。写真⑧。

●恒例の国際交流合宿

国際基督教大学の「ICU学生セミナー」(三八名)はこの秋で七回目。学年・専攻・国籍を越えた計二八名が、今回は「自由」をテーマに討論。一方、五回目を迎えた法大国際交流センター主催の「国際交流合宿セミナー」(三五名)では、同大学内外の外国人講師を招き、二泊三日で「人間と道具」ヒトはどこまでサルか」を自然人類学と考古学の両面から学習した。これも秋の恒例行事。今年で六回目の「日豪合同セミナー」(日豪学術文化センター主催)は11月の第一週末に開催。オーストラリアからの留学生を含む両国の関係者計一二〇名が、今回は「多極化する日豪関係」を政治・経

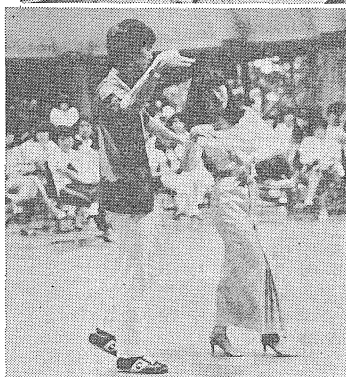
(14ページに続く)



③ 広島原爆記念日 8月6日8時15分、教師館屋上に在泊者有志が集まり、広島出身者が真理の鐘を点鐘。これを合図に在泊者がそれぞれ1分間の黙禱。



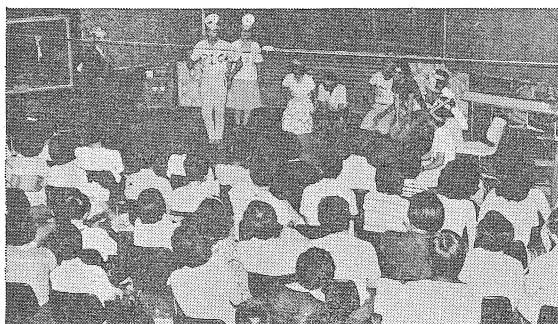
クラブ特集



①② 国際学生会議
アジア・太平洋地域7カ国70名が5泊6日の討論と生活交流。文化紹介の集いでは、お国の歌や踊りを披露〔上=韓国, 下=タイ〕。

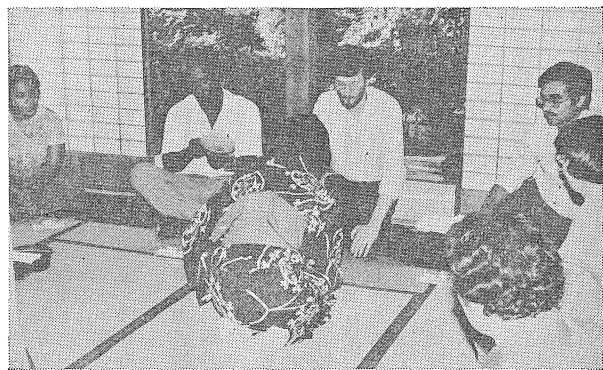
国際交流を中心に

パスに拾う



④ 1週間の英語集中訓練
英語教育協議会（ELEC）主催。全国各地から中・高校英語教師が参加して“英語だけ”の合宿生活。お別れ前夜のパーティで英語劇を演じ、研修の成果を披露。

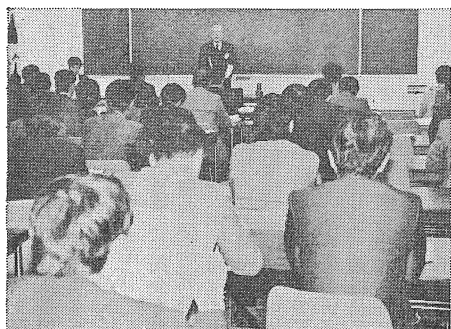
⑤ 一橋大学研究留学生合宿研修
8カ国10名の大学院留学生が、教職員、日本人学生チューターら約10名と7泊。研修の合間に、遠来荘で茶道体験のひとつときを楽しむ。



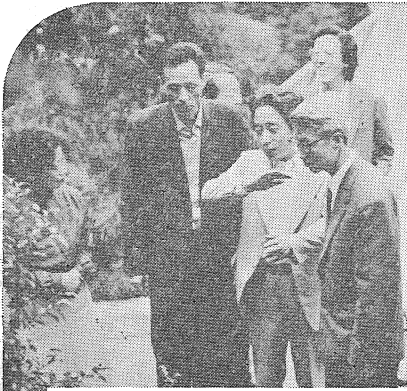
⑥ 津田塾大学人形劇研究会
秋の公演を前に3泊して集中的な練習にはげむ。



⑧ 厚生補導研究協議会
文部省主催、全国52国立大学の関係職員ら約60名が3泊。開講式で歓迎のあいさつをする中川館長。



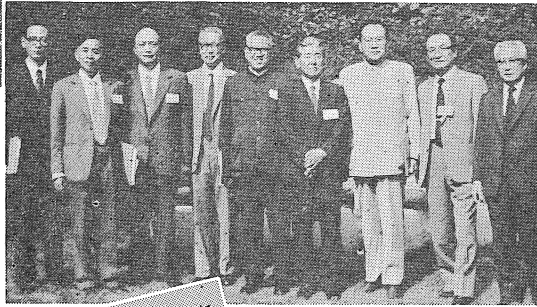
⑦ 順天堂大学病院業務改善セミナー
15年目を迎えた恒例のセミナー。長年の友情を暖めあうため、飯田名誉館長が夕食パーティで歓迎のあいさつ。



⑨日豪合同セミナー
6回目を迎える『草の根レベル』での日豪交流。記念講演のあとのティー・タイムで参加者と歓談されるN・カリー駐日大使夫妻。

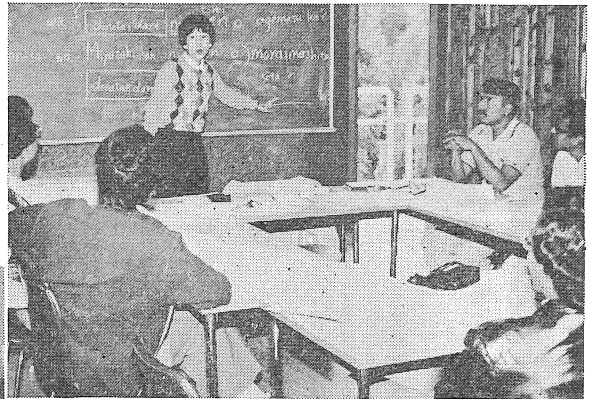
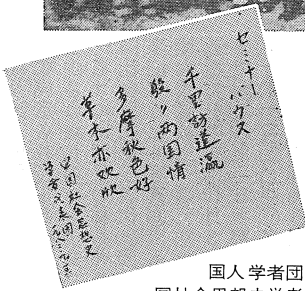


夏から秋の キャン



⑩⑪⑫二つの日中
学術交流

〔上〕中国社会思想史研究会。11名の日中学者によるシンポジウム。菊地昌典東大教授(中央)の案内で構内を散策する一行。〔中〕日中寄生虫学セミナー。40名が4泊。国際セミナー館前庭で中国人学者団と関係者が記念撮影。〔下〕中国社会思想史学者団から寄せられた記念の色紙。



⑬⑭パキスタン電力技術者グループ

約半年の滞日研修を前に2週間にわたる日本語の特訓(右)。夕食時に他の在泊グループと交歓、お国の歌を披露(左)。



⑮交歓会でオーケストラの演奏

合宿練習で来泊のくにたち市民オーケストラ(42名)の即興演奏で賑わう週末食堂での交歓会。折から滞在中のネパール大使夫妻、パキスタン技術者一行なども参加。



⑯ネパール大使を迎える
ネパール研究学会で来泊のB・ンレス
タ駐日大使夫妻(中央)を迎えて歓談する
中川館長夫妻(左)。

（11ページよりつづく）
済・社会・文化の四つの分科会に分かれて討論した。駐日大使ニール・カリー氏がゲストとして迎えられる、記念講演のあと夫人とともに屋外のお茶の集いで参加者たちと歓談された写真⑨。

● ハウス見学のグループを迎える

ハウスの建築群を題材にして「よい建物とは」を討論する東京理科大学建築計画ゼミ（六〇名）は五年目の合宿。昨年についで東洋大建築学科の教師・学生計六七名が日帰りで来館、昼食をはさんで約三時間見学。また、日本女子大

◆ わたしたちの合宿
自己理解のための交流合宿

東京都立大学助教・カウンセラー
鳴澤 寛

セミナー・ハウスには十年近くお世話になっている。毎年二、三回来ていたので相当の回数になる。ここで三、四日のエンカウンター・グループを始めるようになったのは、我が都立大には宿泊施設がないこと、ここでの宿泊なら学生への宿泊費の補助が大学から出ること、自由で解放的であると同時に最小限の規律があつて生活し易いことなどからである。

ここに来る学生は二群あつて、一群は学生相談室が公募して集まつた学生たちで、もう一群は私の授業（臨床心理と教育心理）を受講している学生たちである。前者は相談室でカウンセリングを受けた学生たちの仕上げ作業の目的と潜在的神経症学生への治療的な予防活動とを兼ねている。正課の授業

の職員一行計九六名が10月中ふた手に分かれて、相模湖方面への行楽の途次、ハウス見学に立ち寄られた。構内を一巡された一行は最後に、同大元学長故上代たの先生のお名前を戴いた「上代池」の前に立ち、先生のご功勞をしのばれた。

● 近隣アジア諸国の人びと

この秋、ハウスは近隣アジア諸国の人びととの得難い接触と交流の機会に恵まれた。まず二つの日中学术交流で相次いで中国人学者団の来泊を迎えた。一つは9月23日から二泊で行われた「ローザ・

のない日をぬって実施しているが、参加希望者は年々増えている。学生の精神的健康の増進とその予防に大変役立つている。精神的健康が向上してくると学習意欲も高まり、かつ対人関係も円滑になっていくのだから人の心とは面白いものである。後者は私の独断と偏見で強制的に来させられている学生たちである（もっとも、この頃は慣れだつたのか受講してない学生たちもかなり参加するようになった）。

この頃の学生たちは頭でっかちの体験欠乏症で、内臓感覚的な感受度が鈍いうえ、そもそも教育と心理学とが少なくとも人間相手に仕事をすることは自己の人間性とか人柄が最大の武器・道具なのだから、この自分という道具の傾向・性質・長短・感受性・影響性等々十二分に心得て、使い方をわきまえておく必要がある。心理で使う諸テストは小道具であつて、勉強しようと思えば一人でもやれなく

ルクセンブルグ研究会」で、東大菊地昌典、成蹊大宇野重昭、中大伊藤成彦各教授らが中心となって企画されたこのシンポジウム（一名）には団長の林基州教授ら中国社会科学思想史学者代表団の五名が来泊された写真⑩。もう一つは慶大浅見敬三、順天堂大家裕両教授らを中心に10月3日から7日まで開かれた「日中寄生虫病学セミナー」（最大四〇名）で、この方には団長の鄭崗教授ら中国寄生虫病学術代表団の六名が四泊された写真⑪。両代表団のメンバーはともにハウスの生い立ちとここの生活交流に深い関心を示さ

もない。一人では磨けない大道具をまず鍛え、かつ、今日の教育の欠陥も補おうという高鳴な趣旨の下に実施しているのであるが、三、四泊ぐらいでは僅かな影響しか与えられないだろうし、事実、毎回不十分さを実感しながら山を降りている。しかし、幸い、卒業までに数回参加する学生たちが出てきたり、福祉や教育や相談の実践活動に精励している人たちが多くなつたことから、少しは心の楔子（せっし）になつてはいるのではないかと秘かに安堵し自己満足している昨今である。



遊来荘にて

れた。以下、両学者団が色紙に寄せられた即興詩より一句を選んで紹介したい。
「千里訪蓬瀛、殷殷両国情、多摩秋色好、草木亦欣欣」（蓬瀛は日本の謂）写真⑫。
6月に初来泊のパキスタン・カラチ電力技術者グループ（本紙前号に既載）につづき、この11月には同グループの第二陣九名が、約半年の滞日研修に先立つ日本語の訓練（国際日本語普及協会が担当）で前後二回、計一四泊された。一行は毎朝9時30分から午後3時20分まで日本語の特訓写真⑬。そのかたわら在泊者やハウス職員との交流体験にも積極的な姿勢を示した。同月13日（土）の夕食時に行われた交歓会（一〇グループ計一五四名）では、代表のナビード氏が日本語で感銘深いスピーチ、つづいて全員がお国の歌を披露し写真⑭。これに代えて、たまたま劇の練習で来泊中の津田塾大シニエイクスピア劇研究会と大学連合ロシア語劇研究会の両グループも、それぞれの劇の一景を熱演した。右記一行滞在中の11月20日（土）には、日本ネパール協会主催のネパール研究会（二二名）が開催され、ハウスは駐日ネパール大使バドリ・シレスタ氏夫妻の来泊を迎えた。経済学者として大学教授の体験をもつ同大使はハウスの活動に親しい共感を寄せられ、週末の夕食交歓会（九グループ二〇〇名）でも日本・ネパール両国の相互理解を願う心のこもったメッセージをのべられた。なおこの交歓会では、たまたま初めてハウスで合宿練習を試みた「くにたち市民オーケストラ」のメンバー四二

名が自発的に、ハンガリア舞曲など素晴らしい演奏を三曲披露され写真⑮、またその伴奏で全員が合唱するなど、期せずして全館あげての交歓風景が繰り広げられ、同大使夫妻やパキスタン人一行を喜ばせた。翌21日（日）、中川館長夫妻が同大使夫妻を接遇、川喜田二郎筑波大教授ら学会関係者を交え、館長室で約一時間歓談された写真⑯。

● 利用状況

* 同月2日利用
* 同月3日利用
個人・日帰り利用者を除く

8月

- 明治学院大学教授 尾崎 精
- 成蹊大学教授 上妻 良二
- 駒沢大学教授 * 寺中 良二
- 東京学芸大学教授 林 勉
- 早稲田大学教授 * 大槻 健
- 東京大学教授 福島 良一
- 順天堂大学教授 菊地 元一
- 青山学院大学教授 三戸 公
- 立教大学教授 大澤綱一郎
- 東京理科大学教授 桐谷 維
- 東京都立大学教授 宮腰 賢
- 東京学芸大学助教授 岩崎 史郎
- 日本女子大学講師 加藤 寛
- 慶応義塾大学言語研究 * 加藤 寛
- 中央女子通信教育部 長尾知真子
- お茶の水女子大講師 横田 澄司
- 明治大学教授 伊丹 邦夫
- 東京理科大学教授 村越 邦男
- 中央大学助教授 鳴沢 昌弘
- 東京都立大学助教授 吉村 三郎
- 東京工業大学助教授 羽田 三郎
- 青山学院大学教授

- 東京都立大学教授 山住正己
 明星大学通信教育部
 中央大学生活協同組合
 慶応義塾大学助手 田村 俊作
 一橋大学教授 塩野谷祐一
 千葉大学助教授 武蔵 武彦
 千葉大学医用電子工学研究会
 法政大学教授 太田 卓
 国際基督教大学教授 井上 和子
 武蔵大学教授 渡辺 勉
 東京大学教授 見田 宗介
 一橋法学研究会民法自主ゼミ
 早稲田大学教授 直川 誠蔵
 武蔵大学教授 武内 清
 大妻女子大学助教授 中村 悦子
 一橋女子大学助教授 松石 勝彦
 武蔵工業大学文化団体連合会
 東京大学教授 豊田 弘道
 一橋大学助教授 清水 啓典
 早稲田大学教授 岡崎 涼子
 東京大学助教授 村上陽一郎
 一橋大学外国人研究留学生夏季合宿研修
 お茶の水女子大助手 日下部直子
 大妻女子大学助教授 森住 衛
 東京理科大学教授 國分 康孝
 東京学芸大学教授 永野 賢
 東京大学助教授 山本 泰
 明星大学教授 木村 久男
 中央大学助教授 大須 眞治
 中央大学教授 富岡 幸雄
 法政大学教授 川上 仁雄
 東京都立大学教授 山川 忠
 東京学芸大学附属高校25期3年E組クラス旅行合宿
 日本女子体育短期大学助教授
 日高 精二
 玉川大学教授 田中 宏
 茨城キリスト教短期大学教授 佐藤 京子
 芝浦工業大学柏高校英語部
 都立立川高校英語部
- 山住正己
 神奈川県立清水ヶ丘高校英語研究
 同好会
 市川市立第七中学校教職員研修会
 日本国際学生協会
 文京女子短期大学・育英工業高等
 専門学校
 語学教育振興会
 情報科学若手の会
 日本作業療法協会学術部
 読売芸術アカデミー
 日本基督教教会柏木教会
 文学教育研究者集団
 千葉市幼稚園協会
 朝日カルチャーセンター*
 東京都高等学校英語教育研究会
 聖書キリスト教会
 恵みバプテスト教会
 武蔵野読書会
 リコーダーワークショップ
 英語教育協議会
 西久保保育セミナー
 日本基督教団立教教会聖歌隊
 国立西埼玉中央病院附属看護学校
 学習院大学フランス学生会OB会
 日本電気*
 コーポレートコミュニケーション
 研究会
 神田ロー・スクール
 富士通興業
 気象庁
 アイワールド*
 八王子市教職員組合
 ホソカワミクロン
 9月
 (13グループ、延五、五八二人)
 東京大学POOH
 慶応義塾大学教授* 加藤 寛
 日本女子大学ESS
 学習院大学教授 児玉 久雄
 東京都立大学教授 小池 滋
 学習院大学音楽愛好会リーダー
 セミ
- 学習院大学教授 齋藤 孝
 日本大学大学院教育学研究会
 東京都立大学助教授 井堀 利宏
 横浜国立大学助教授*佐々木弘明
 横浜国立大学助教授 有光 友学
 青山学院大学助教授 国岡 昭夫
 日本大学短大講師 北川 道男
 慶応義塾大学教授 深海 博明
 東京都立大学助教授 鳴沢 実
 東京大学教授 松原 治郎
 法政大学学友会技術連盟
 一橋大学社会科学ドキュメンター
 ション研究会
 慶応義塾大学安藤・棚橋研究室
 早稲田大学教授 森藤 一男
 早稲田大学教授 由井 正臣
 立正大学教授 中尾 堯
 中央大学助教授 村越 邦男
 立教大学教授 中野 光
 早稲田大学助教授 大槻 健
 埼玉大学助教授 山本 茂
 日本大学講師 山本 賢二
 慶応義塾大学英語会
 慶応義塾大学英語会
 駒沢大学教授 鈴木 幸毅
 早稲田大学世界連邦研究会
 学習院大学教授 門脇 卓爾
 駒沢大学助教授 谷敷 正光
 慶応義塾大学英語会
 東京外国語大学竹内・川口ゼミ
 東京大学教授 木村尚三郎
 東京工業大学教授 黒沢 一清
 立正大学助教授 厚東 偉介
 立正大学講師 大津 悦夫
 早稲田大学教授 長沢 和俊
 早稲田大学法研若手研究者の会
 駒沢大学助教授 浅野 克巳
 相模女子大学翠葉会館表千家
 立正大学講師 喜多 明人
 早稲田大学教授 清水 望
 津田塾大学人形劇研究会
 東京経済大学教授 柴田 高好
 立正大学教授 中村 孝之
- 中央大学教授 佐藤 進
 早稲田大学政治学研究会
 早稲田大学教授 深井 邦二
 早稲田大学講師 浅沢 実
 東京大学教授 坂本 義和
 明治大学教授 原 正彦
 法政大学教授 五味 健吉
 杉野女子大学教授 田村 皖司
 青山学院大学教授 深沢 実
 津田塾大学ITC
 産業能率短期大学教授 岡部 博
 成城大学会計学研究会
 東京経済大学教授 竹前 栄治
 日本大学名誉教授 小田切松義
 青山学院大学助教授 寺東 寛治
 中央大学助教授 三橋 文明
 早稲田大学講師 井上 彰
 立教大学助教授 北野 弘久
 立教大学文学部集中合同講義A
 学習院大学教授 荒井 良雄
 中央大学教授 五井 一雄
 明治学院大学旅行研究会
 明治学院大学教授 清水 徹
 相模女子大学教授 五十嵐良雄
 学習院大学パブリック・スピーキ
 ング研究会
 立教大学教授 井上 治典
 慶応義塾大学助教授 鈴木 貞彦
 明治大学新聞研究会
 明治大学教授 藺出 碩也
 立教大学講師 服部 正治
 立教大学助教授 村上 和夫
 立教大学助教授 小山 康夫
 立教大学教授 武沢 信一
 中央大学法学部学生会多摩支部
 東海大学短期大学部二年情報処理
 工学コース総合ゼミ
 明治学院大学教授 増田 茂樹
 早稲田大学教授 田村 恭
 東京薬科大学合唱団二年会
- 東京学芸大学助教授 野口 裕之
 東京都立大学助教授 小寺 彰
 東京大学教授 高野 暉
 東京都立大学教授 福井 芳男
 東京都立大学教授 加藤 洋一
 東京薬科大学学生協学生理事會
 上智大学教授 佐野 泰彦
 東京大学助教授 村上陽一郎
 東京農業大学短期大学助教授
 中村カホル
 東京農業大学教授 西郷 光彦
 上智大学教授 平井 久
 埼玉大学助教授 白井 宏明
 都留文科大学教授 和田 明子
 山梨英和短期大学英文学科英文学
 セミナー
 和洋女子大学助教授 清川 英男
 原子衝突若手の会
 日本生活学会
 ローザ・ルクセンブルグ研究会
 青生塾グループ
 国立療養所中野病院
 カトリック中央協議会
 東京都精神病院協会
 関戸電機
 レヴゼン
 日本電気*
 日本水産八王子総合工場*
 京王百貨店*
 伊勢丹デパートセンター
 東急百貨店労働組合
 三栄
 東芝プロセスソフトウェア
 ブルーチップ
 日本電気コストコンサルティング
 三洋電機東京販売
 10月
 (81グループ、四、〇六六人)
 お茶の水女子大学助教授
 早稲田大学教授 宮島 喬
 大槻 宏樹

- 成蹊大学教授 宇野 重昭
- 武蔵大学講師 犬塚 孝明
- 早稲田大学教授 浜口 晴彦
- 成蹊大学教授 安藤 英治
- 立正大学助教授 村越 邦男
- 電気通信大学助教授 木村 耕
- 帝京大学医学研究会 都留 春夫
- 国際基督教大学教授 菊地 昌典
- 東京大学教授 関田 寛雄
- 青山学院大学助教授 関田 寛雄
- 法政大学不動産鑑定研究会 中島 義博
- 東京経済大学職員 中島 義博
- 中央大学講師 畑尻 剛
- 順天堂大学病院業務改善セミナー 畑尻 剛
- 東京大学生協同組合 小林 善彦
- 東京大学教授 川原 栄峰
- 早稲田大学助教授 渡辺 仁史
- 早稲田大学助教授 川路 紳治
- 学習院大学シエイクスピア劇研究会 大羽 滋
- 学習院大学教授 大羽 滋
- 東京都立大学教授 鈴木 章雄
- 中央大学外交研究会 鈴木 章雄
- 中央大学講師 鈴木 章雄
- 国際基督教大学学生セミナー 鈴木 章雄
- 東京理科大学教授 沖塩荘一郎

- 学習院大学フランス会部 野口 武徳
- 上智大学テアトロ倶楽部 野口 武徳
- 成城大学教授 野口 武徳
- 中央大学経済学会 近藤 保
- 東京理科大学教授 近藤 保
- 明治学院大学教授 小野 哲郎
- 東海大学教授 師岡 孝次
- 武蔵大学横武会 小谷 誠
- 東京電機大学教授 小谷 誠
- 北海道大学教授 山田 定市
- 山梨県立女子短大幼児教育ゼミ 山田 定市
- 東京YWCA専門学校英語科 山田 定市
- 第19回大学教員懇談会 山田 定市
- 第9回国際学生セミナー 山田 定市
- 日中寄生虫病学会 山田 定市
- 日本小児神経学会 山田 定市
- 海洋化学若手シンポジウム 山田 定市
- 国立西埼玉中央病院附属看護学校 山田 定市
- 日本基督教団教誨事業協力会 山田 定市
- 生田キリスト教会 山田 定市
- 弓町本郷教会 山田 定市
- 高橋聖書集会 山田 定市
- 東京YWCA 山田 定市
- 東京都立保育園園長会 山田 定市
- 日本トラバノール 山田 定市

- 日本電気コストコンサルティング 石井 昭
- 東急百貨店労働組合 岡沢 憲美
- 東京芝浦電気 岡沢 憲美
- 日本エヌシービー 岡沢 憲美
- 明治屋 岡沢 憲美
- 富士通オフィス機器 岡沢 憲美
- 全国農業協同組合連合会 岡沢 憲美
- 日電アネルバ 岡沢 憲美
- 小西六労働組合 岡沢 憲美
- アイワールド 岡沢 憲美
- 小西六写真工業 岡沢 憲美
- 日野協力会 岡沢 憲美
- 富士電機計装 岡沢 憲美
- 日本電気 岡沢 憲美
- ラッキーマイ 岡沢 憲美
- すかいらく 岡沢 憲美
- 田村電機製作所 岡沢 憲美
- 遠くから来る会 岡沢 憲美
- 富士電機製造 岡沢 憲美

- 上智大学スペイン演劇研究会 石井 昭
- 法政大学国際交流台宿セミナー 石井 昭
- 東京医科大学教授 石井 昭
- 早稲田大学教授 石井 昭
- 立教大学教授 石井 昭
- 専修大学助教授 石井 昭
- 法政大学助教授 石井 昭
- 成城大学学長 石井 昭
- 中央大学学長 石井 昭
- 中央大学教授 石井 昭
- 立正大学助教授 石井 昭
- 中央大学教授 石井 昭
- 中央大学教授 石井 昭
- 東京外国語大学教授 石井 昭
- 東京学芸大学教授 石井 昭
- 慶応義塾大学イアエステテ 石井 昭
- 津田塾大学シエイクスピア研究会 石井 昭
- 東京都立大学教授 石井 昭
- 早稲田大学コンツェルト 石井 昭
- 法政大学教授 石井 昭
- 立教大学教授 石井 昭

- 東京都立大学助教授 石井 昭
- 慶応義塾大学有賀・益田研究室 石井 昭
- 早稲田大学教授 石井 昭
- 上智大学バスケットボールサークルAPES 石井 昭
- 中央大学教授 石井 昭
- 東京農業大学助教授 石井 昭
- 明治学院大学教授 石井 昭
- 慶応義塾大学教授 石井 昭
- 明治学院大学教授 石井 昭
- 武蔵大学教授 石井 昭
- 法政大学教授 石井 昭
- 電気通信大学機械系学科研修会 石井 昭
- 一橋大学教授 石井 昭
- 明治大学教授 石井 昭
- 学習院大学シエイクスピア劇研究会 石井 昭
- 駒沢大学助教授 石井 昭
- 東京都立大学助教授 石井 昭
- 国際基督教大学講師 石井 昭
- 中央大学教授 石井 昭
- 東京都立大学教授 石井 昭
- 日本大学教授 石井 昭
- 武蔵大学教授 石井 昭
- 淑徳大学講師 石井 昭
- 東京理容美容学校教職員研修会 石井 昭
- 横浜商科大学助教授 石井 昭
- 日本女子大学附属高等学校 石井 昭
- 青山学院高等学校 石井 昭
- 文部省厚生補導事務研修会 石井 昭
- 現象学解釈学研究会 石井 昭
- 第5回大学合同セミナー 石井 昭
- 日本ORR学会 石井 昭
- 放電研究グループ 石井 昭
- 日本ネパール協会 石井 昭
- 第6回日豪合同セミナー 石井 昭
- 自我と関係論研究会 石井 昭
- くにたち市民オーケストラ 石井 昭
- 日本精神科看護技術協会 石井 昭
- 沖電気工業 石井 昭
- 小泉産業 石井 昭
- 小西六写真工業 石井 昭
- カシオ計算機 石井 昭

編集後記

新春の多摩の丘から、ハウスに連なる方々のご多幸をお祈り申し上げます。

旧暦12月30日、江沢洋学習院大教授がご子息たちを伴い、月食観測で来泊されました。第87回大学共同セミナー「宇宙」の開催を記念して、先生方が寄贈して下さいた望遠鏡が大いに活用された由です。

一九八三年は、教師館の屋上で真理の鐘をついて迎えました。鐘の響きで多摩の丘の樹々の葉が揺れる、とは飯田名誉館長の信仰です。夜空は澄んで、おだやかな元旦でした。

本号は合併号として夏から秋の活動を収録しました。グラフ特集で利用の方々の表情や交流風景の一端をお伝えします。(能)